快適に学べる環境を…

STOP SEXUAL HARASSMENT

瓶子長幸教授

セクシュアル・ハラスメント防止委員会（瓶子長幸委員長）では、「セクシュアル・ハラスメントの被害者にも、そして加害者にもならないように」をコンセプトに、パンフレットやホームページを通じて、学生や教職員の意識啓発に取り組み、相談に応じている。
最近の相談状況について瓶子委員長は次のように話している。

大学構成員が快適に勉学、労働、研究する環境を保持するため、2000年2月に委員会が発足し、徐々に認知されてきたと感じています。メールが普及してきたため、学生を中心に相談が増えてきました。場合によっては、学生相談室から相談が回ってくることもあり、相談室と連携をとりながら対応しています。

最近は、メールでの『顔の見えない嫌がらせ』による相談が増えているのが気になります。安易に自分の情報を教えることのないよう、自己責任をもってほしいと思います。また、軽い気持ちで言った言葉が、相手を深く傷つけてしまう場合があります。相手のことを思いやる心を育てることも私たちの役割と思っています。秋には研修会を予定していますので参加して、理解を深めてほしいですね。

不幸にしてハラスメントが発生してしまった場合には、被害者の保護に努め、加害者に対して断固たる措置をとるためにさまざまな相談方法（下記）があります。実際に相談がなければ、委員会はどうすることも出来ません。委員には守秘義務があります。安心して相談に来てほしいのです。『行動を起こすこと』はとても勇気のいることですが、近くに支えになる人と組織があることを心に留めて、楽しいキャンパスライフを過ごしてください。

＜相談受付窓口＞

専用電話・FAX：044-900-7858
E-mail：sekuhara@acc.senshu-u.ac.jp

※留守番電話とファックスでお受けしています。留守番電話の録音内容、ファックスの通信内容にアクセスできるのは防止委員だけです。

セクシュアルハラスメント防止委員

●教員委員（50音順）	●職員委員（50音順）
網野房子（法学部）	阿部恵子（学生生活課）
岩井宜子（法科大学院）	鈴木昌子（育友課）
在間敬子（商学部	永見敦子（経理課）
坂野明子（文学部 ）	府川郁夫（庶務課）
砂山充子（経済学部）	山田正子（就職課）
瓶子長幸（経営学部）	
森克美（ネットワーク情報学部）	

（2005年5月現在）

委員に直接連絡しても結構です。

ホームページhttp://www.senshu-u.ac.jp/sekuhara/

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2005年6月号

[14面]

≪県人会 北から南から≫

沖縄県人会

新入生26人が入会 「エイサー」挑戦も

設立5周年を迎えた沖縄県人会。26人もの新入生が入会し、現在会員は55人（うち半数が自県出身者）。

活動の様子を副会長の貞廣卓さん（経済3・愛知県愛知高）は「“楽しい”の一言です。特に夏期地方活動では毎年沖縄を訪れ、自然・郷土に触れています。会員同士の親睦を深めるため、スポーツレクリエーションなどの企画も頻繁に行っています」と話す。伝統文化のひとつ『エイサー』に挑戦する計画もある。

“沖縄の盆踊り”とも言える『エイサー』は、三線（さんしん）、太鼓、踊り手が縦列になって謡い、踊りながら練り歩くもの。稲嶺萌会長（経営3・沖縄県昭和薬科大付高）は「地元では小学校で一度は習う 踊りです。都内にも団体がいくつかあるので練習して、会員に伝えたい。将来的には沖縄や新宿で行われている『エイサー祭り』に参加し、郷土文化を体験する場にしたい」と話した。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2005年6月号

[14面]

≪緑地帯≫

得意技を身につけよう

昔の卒業生からメールが来た。彼女は、ある製造業の会社に就職しているのだが、この春の配置転換で、自分が希望している部署に変わることが出来たという。

今までは、販売促進部にいて、小売店の店頭での新製品の宣伝フェアなどの企画をやっていたのだが、春からは本社の宣伝部に移って、インターネット広告を担当することになったそうだ。「やったやったという気分です。特技が役に立ちました」という。
彼女の特技はゼミでも有名だった。一つはマンガやイラストがうまいことで、ノートをのぞくとマンガだらけ。子供のころの夢は、少女マンガ家になることだった。

もう一つの特技はパソコン。大学に入ってから始めたそうだが、カットやイラストを作ることから始まって、かなり複雑なフラッシュ作りやアニメ作りにまで進んだ。もちろん自分のウェブサイトも持っていた。

今、企業の宣伝媒体として注目を浴びているのが、インターネットだ。しかし企業のほうには、まだ専門家が少ない。そこで彼女の、画像処理の能力やパソコンの技量が買われたのだろう。

得意技を身につけるということは、就職に役立つということだけではない。自分に対して自信をもち、積極的に生きていくための基本だ。

必ずしも勉強の分野でなくても、サークル活動でも、オタク的な趣味でもいい。自分だけの得意技を作ること、それが、自信をもてる人生を作ることにつながっていくのではないか。（学生部）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2005年6月号

[14面]

≪学部発信≫

ネットワーク情報学部―ITリーダー育てるプロジェクト

全員参加で共同作業

水曜日の2限、いつものように10数人の学生と教員がゼミ室に集まっている。「以上のように、この音楽配信ビジネスは今までにない全く新しいものであり、極めて多くの音楽ファンにアピールするものといえます」スクリーンの前の学生が、そう言ってプレゼンテーションを終えた。すると、間髪入れずに部屋のあちらこちらから質問が飛ぶ。「技術的な課題はどこにあるのか」「ビジネスモデルの新規性はあるのか」「どのようなパートナーと連携するのか」「収益はどのように得るのか」

これは、ネットワーク情報学部の看板科目である「プロジェクト」の授業風景である。「プロジェクト」は、3年次生全員が受講する通年の専門必修科目である。250人の学生が10数人のチームに分かれ、自分たちが決めたテーマのもとに、1年間かけて、ビジネス、情報システム、デザイン作品などを作り上げる。この「プロジェクト」の中で、学生たちは実社会で発生するようなさまざまな困難に遭遇し、今まで習った専門技術を総動員して立ち向かう。さらに、マネジメント、コミュニケーション、論理的思考といった問題解決能力を修得するのである。

抜群の就職率を記録

ネットワーク情報学部は今年創設5周年目を迎え、この3月に第1期生を社会に送り出した。彼らの就職状況はネットワーク情報学部だけでなく、多くの専修大学関係者の注目の的となった。ふたを開けてみると、卒業者就職率（就職者数を卒業生数で割ったもの）81%という専修大学の学部の中でも群を抜く高い値であった。それ は、仕事に対するモチベーションが極めて高いことを示していた。何が彼らを変えたのか、それは、やはり「プロジェクト」だった。卒業の日、彼らは口を揃えてこういった。「プロジェクトで自分のやりたいことが見えた」「チームプレーの大切さを知った」「システムを作り上げることの苦しさとうれしさが分かった」「断片的だった専門技術が一つにつながった」「これから何を学ぶべきかが分かった」

現在、日本は厳しい国際競争の中で航路のない荒海に乗り出そうとしている。このような社会で必要な人材は、上長の命令を忠実にこなす優等生型ではなく、自分で考え行動する問題解決型の人間である。ネットワーク情報学部では、情報技術を武器に新しいビジネスを企画し運営していく、新時代のリーダーとなる人材を育成することを目指している。

（小林 隆・写真中央）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.